

帝都鳴動Ⅱ

三木原慧一

Keiichi Mikihara

立ち読み専用

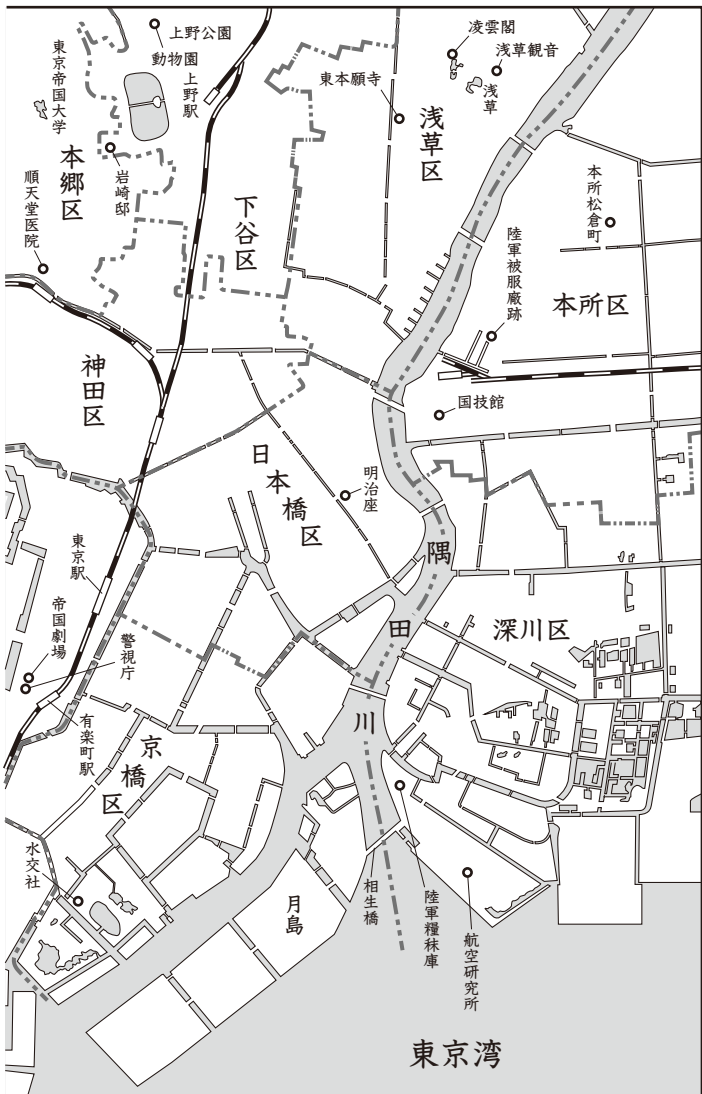
立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

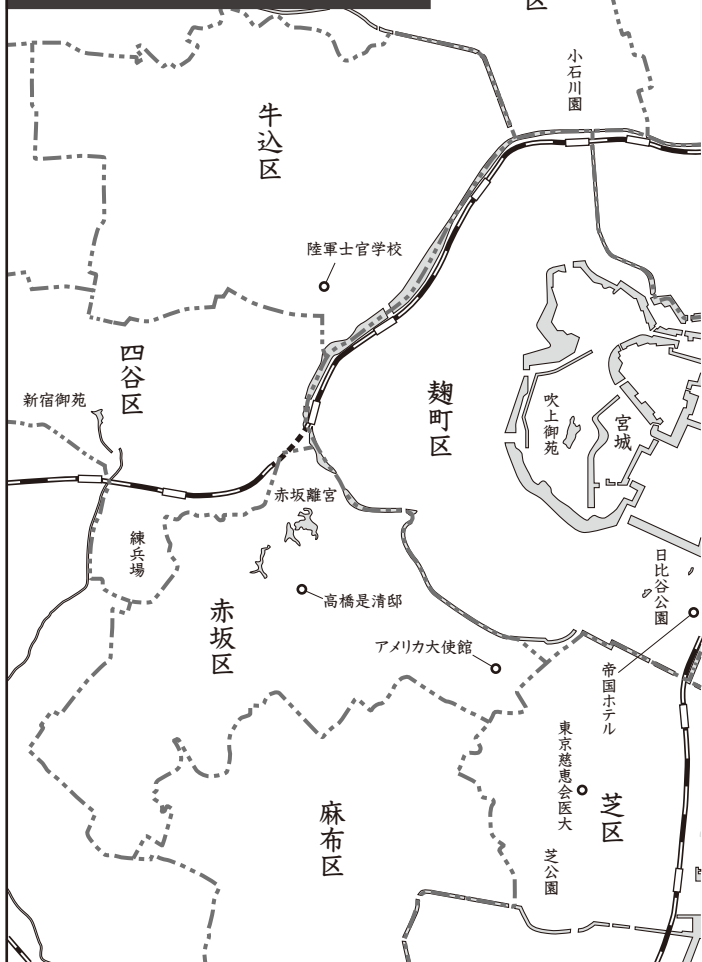
目次

プロローグ 関東大震災	9
第一章 正体見たり	21
第二章 点と線	46
第三章 史上最悪の「賭け」	74
第四章 誇り高き救難	95
第五章 逆探知	123
第六章 懊悩	161
第七章 The Art of War	188
第八章 恐るべき誘導	218
エピローグ 幻のゴール	247



東京市地図

(大正12年9月1日現在)



地図
安達裕章

帝都鳴動Ⅱ

プロローグ 関東大震災

一九二三年九月一日。

午前一一時五八分四四秒。

東経一三九・三度、北緯三五・二度、相模湾さがみわん北部を震源とする巨大地震が発生した。

規模、マグニチュード七・九。

最大震度七。

後世が記す『関東大震災』である。

陸上自衛軍先任曹長あかしまもる明石守は無線に達した。

「三浦半島から第二波が来る。総員、待機」

次の瞬間、不気味な地響きと共に激しい横揺れが海軍火薬廠かやくしょうに襲いかかった。

規模は第一波を上回る。凄まじい揺れだ。

明石は目前の光景に息を呑んだ。火薬廠第二工場の煙突が奇妙な音を立て、根元からへし折れたのだ。

無線から部下たちの叫び声が続く。

「あと少しで揺れはおさまる、耐えろ」

途端に背後の管理棟が倒壊した。激しい土煙と共にスレートの碎ける音が続く。

一瞬、水平線の向こうに青白い光が広がる。

合衆国海軍飛行船シエナンドーの操縦キャビンで、海上自衛軍三等海佐魚住惣司うおすみそうじは瞬またたいた。

地震発生に伴う異常現象か。

伝令の声が聞こえる。

「艦長、駐日アメリカ大使館より緊急入電であります。来た、見た、勝った」(Veni Vidi Vici)。以上」
 將軍ユリウス・カエサルがゼラの戦勝を伝えるべくローマに伝えた三語、今は大地震発生を伝える暗号だ。

ウイリアム・ハルゼー海軍中佐が魚住を見た。「どうやらハラキリをせずに済んだな、魚住少佐。貴官の予告どおりの展開だ」

ウイリアム・アジャー・モフェット合衆国海軍少将が達した。「日本政府より、我が海軍に救難要請が発せられた。これより飛行船シエンンドーは、日本を直撃した大規模震災に対する搜索・救難活動に入る。艦長、ただちに実施せよ」

「アイ・アイ・サー」シエンンドー艦長、フランク・ロバート・マクラリー中佐が応じる。「前任、真方位〇七八、速度そのまま」

「アイ・キャプテン。真方位〇七八、速度そのまま」

艦長の命令に最優先上級曹長が復唱、命令と号令が反復し、方向舵手が舵輪を回す。

シエンンドーは東京上空に針路を取った。眼下に航行中の連合艦隊戦艦隊が遠ざかっていく。

「シエンンドーが上空から離脱します、長官」

連合艦隊旗艦を務める戦艦長門の艦橋では、作戦参謀山本五十六中佐の声に、連合艦隊司令長官鈴木貫太郎が笑みを浮かべていた。

「素早いな。一つ事情を聞いてみてくれ」

「判りました」山本は準備に入った。

魚住が設置した八三式無線電信電話装置で相手呼び出す。

「長門よりシエンンドー、魚住少佐、応答しろ」

空電音が短く響いた後、魚住の声が返ってきた。

「こちらシエンンドー、どうぞ」

「山本中佐だ。たった今、日本政府は、アメリカ海軍に遭難救助要請を出した」

『こちらにも司令官が艦長に東京市内偵察を命じました。私は火災発生地点の特定に入ります。他に何か情報、命令がありますか』

「ある。津波が収まり次第、連合艦隊は東京湾に救難部隊の揚陸を開始する。津波の到達は何分後になる、少佐？」

『事前計算では五分後です、山本中佐』

山本は、了解、以上と応じ、無線を置いた。「長官、シエンンドーは東京市内偵察に向け離脱、津波の来襲は五分後との事です。規模は」

「小さいか」鈴木長官が言った。

「艦艇には影響ありますまい。せいぜい一メートル程度のようです」

「やはり大変なのは、陸地か」

「見張員、沿岸が見えるか」山本は訊ねた。

「無理です。霞がかかったようで、見通せません」

山本たちは顔を見合わせた。ほんの数分前、沿岸部の模様を仔細に報告したのが同じ見張員だ。

鈴木長官がはたとうなずく。「民家が倒れ、土埃が上がっているのだ。それが即製の煙幕となっておる」

「なるほど」山本は応じ、顔をしかめた。

横浜は全世帯に耐震補強工事を実施したはずだが、それでも家屋多数の倒壊を免れ得なかったのだ。

「まだまだ揺れるぞ、これは」鈴木長官が制帽を被り直した。沿岸を見つめる。

東京市下谷区・岩崎邸を改修した関東防災総司令部は激しく揺れ続けていた。

陸上自衛軍対原発テロ特殊部隊（プロメテウス）指揮官、高野徹也一等陸尉は厳しい顔つきだ。

岩崎邸は広大な敷地を誇る。屋敷は多くの使用人が働き、一部は邸内に宅地を与えられていた。

窓から垣間見えるその住宅が次々と倒壊していた。壁面が壊れ、建物が急速に傾き、土煙を上げつつ、大地に没していく。

「外は凄いですね」

ＩＴ担当星野育孝ほしのやすたか三曹が口を開く。総司令部の揺れが会話可能なレベルなのは、免震装置のおかげだ。自家発電器、指揮通信施設、医療施設、総司令部に施工され、震度六から七の烈震を震度五前後に抑制する。この施工から漏れ、耐震強度を満たさぬ建物は倒壊を免れない。

「司令部の人的損害は、まずあるまい」高野が応じた。「震災対策に無関係な者は岩崎邸を退去、安全地域に退避済みだ」

不意に揺れが小さくなりはじめた。

地響きが静まり、免震装置によって長周期の小さな揺れが続いた後、ぴたりと止まる。

途端にどよめきが司令部内を満たす。

高野たち未来人が予告する大地震を体験した。その衝撃が思わず声となったのだ。

間髪を容れず、関東防災司令官福田雅太郎ふくだまさたろう陸軍大将が声を張り上げる。

「一同、よく耐えた。全員、無事だな」

私語がぴたりと止む。福田は高野に命じた。「高野一尉、第一種救難配備を発動せよ」

「了解。これより第一種救難配備を発動、実施します」

高野は机上のスイッチを捻ひねった。小さなブザー音が鳴り、用意された録音メッセージが流れ出す。

『防災任務に就く総員に達する。関東防災司令官より、第一種救難配備が発令された。これより全市民に対する搜索救難活動を開始する。繰り返し。関東防災司令官より、第一種救難配備が発令された。これより全市民に対する搜索救難活動を開始する。状況終了まで、総員奮闘努力せよ。以上』

メッセージは総司令部館内の他、非常用全周波数で発信中だ。

通信士が報告する。「高野一尉、和田警視総監からお電話です。切り替えます」

高野は手元の電話を取った。

『和田です。これより消防課を含む警視庁の指揮権を貴官に移譲します』

「承ります、和田警視總監」

『ご武運をお祈りします。では』

電話が切れる。受話器を置く高野に福田司令官が決意の眼差しを向ける。

「高野一尉、君の後ろには、いつでも私がいる。貴官の思うよう、存分にやれ。責任は私が取る」

司令官の言葉に高野は身が引き締まる思いだった。

「お任せを」

無線受信を意味するブザー音が鳴る。高野は送受話器を取った。「こちら総司令部」

『アカシ〇一より総司令部へ報告。目標の一人、金益相イカサンの拘束に成功しました』

高野は素早くスピーカーフォンに切り替えた。「金益相を拘束。間違いないか」

『間違いありません。他、銃撃戦の末、義烈団八名を拘束、我が方の損害、負傷二、死亡ゼロ』

「了解。よくやった。撮影の方はどうだ」

『事前警告、制圧、確保の全過程を撮影。英語による警告も含め、部隊行動基準を全て守り、目標の確保に成功しました』

部隊行動基準は自衛軍用語、国際世界ではROEと呼ぶ。簡潔に記せば交戦のルールだ。大正時代には未発達の分野だが、高野は明石に完璧な履行を命じた。後々、それが日本の国益に叶うためだ。

「ご苦労、先任。部下たちにも、よくやったと伝えてくれ。以上」

無線を置く。途端に拍手が始まる。司令部の誰もが笑みを浮かべ、次々と高野に祝福の言葉をかける。

高野は応えつつ、むしろ表情を引き締めた。

横浜沖に停泊するイギリス発豪華客船『モーターア』は、不気味に静まりかえっていた。

一分前は異様な咆哮ほろろに満ちていた。船体がわずかに揺れただけで、三等船室から獣を思わせる声が一

齊に湧き起こった。

震災発生時、船室から見える横浜沿岸の光景は恐るべきものだった。

周囲一面の家屋が片つ端から潰れ、土煙が立つ。

港湾施設が異様な金属音を放ちつつ、大崩壊する。

大地がうねり、停車中のトラックを呑み込むさまは多くの貨客船から目撃された。

爆発が続け様に発生、ガソリンの焰ほのおが噴き上がった時、洋上退避組の恐怖は限界に達した。船底を突き破り、大揺れが押し寄せる錯覚に囚われたのだ。

特に三等船室の混乱は酷ひどいものであった。すさんだ面持ちの男たち、関東圏内から集められた無政府主義者、共産主義者たちが壁や扉を叩き、くぐもつた響きが船内に広がる。震災発生時に混乱をもたらす元凶と目された彼らは予防拘束され、三等船室に鮎詰め状態だ。

そこへ震災が視覚的に襲いかかった。

彼らが冷静を維持していたなら、自分たちがとて

も安全な場所に居ると判ったはずだ。洋上に停泊する船舶は、地上の揺れ、火災から切り離され、長時間留まることが出来る。津波の影響も少ない。ましてや彼らが居る場所は一万トン程度的大型船、排水量の大きさは安全性の確保につながる。

道理を察する思考力は彼らから吹き飛んでいた。半ば暴徒と化した共産主義者たちは、船室の扉を打ち破る寸前だった。

混乱が限界に達したその時、モーターリア船長は部下に命じた。

途端に汽笛の響きが一杯に広がる。最大音量だ。三等船室の男たちは、次の瞬間全身が耳と化した。あまりの大音量に誰もが耳を押さえ、動きが止まる。霧笛は三〇秒続き、はたと止んだ。

モーターリア船上では、葉巻を手にした大柄な中国人が、独り横浜沿岸を見つめていた。駆け付けた部下、王成喜ワンチンハイが声をかける。

「大人、ご無事で」

「うむ」

横浜中華街を統べる華僑の指導者、張芸鴻は、指に挟んだ葉巻を見た。半分ほど吸った葉巻の火が消えていた。張はそれを海に弾き、新品を懐から取り出した。ギロチンカッターで先端をカットし、杉材を使った専用マッチで丁寧^{ていねい}に火をつけた。オイルライターや硫黄成分入りのマッチは、葉巻に嫌な匂いをつけてしまう。

先端に黒い焦げ目が付くのを張はじつと見つめた。葉巻を回転させ、口にくわえ、静かに吹かし始める。芳醇^{ほうじゅん}な香りを楽しみながら張芸鴻は言った。

「王、船舶電話は使えるかな」

「通信管制中ですが、手を回せば何とか」

「用意しなさい。魚住少佐と連絡が取りたい」

「しばしお待ちを」

素早く去る部下の背に一瞥を投げた張は独りつぶやいた。「本当に地震が来るとはな。驚きだよ」

紫煙を吐いた張は目を細める。「本当に驚いた」

三等船室の床下から、くぐもった音が響く。

ようやく自制を取り戻した共產主義者たちが、何かつぶやきはじめたらしい。

細い目をさらに細め、張は手にしたステッキで床を一撃する。鋭い音が響いた。

地震発生時、洋上では時に津波が発生する。これは艦首を正しく波に立てる事で影響を減らせる。

陸地の揺れは免震装置の設置で低減可能だ。

ところが官邸にはそれがない。施工困難な構造と判り、設置の見送りを総理が決めたのだ。

「それが判っているのにこの有様は、我ながら手ばかりだよ。対処が必要だった」

執務室では、床一面に散らばった書類を前に内閣総理大臣加藤友三郎^{かとうともさぶろう}が微苦笑を浮かべていた。

傍らの立憲政友会総裁高橋是清^{たかはしじよしみ}がほっと一言、「さすがに今回は肝が冷えたわ」

「確かに」

「まったく、関東大地震とはよう名付けたものよ。

聞きしに勝る大揺れであったな」

和服の袖を直しつつ、高橋は一方を見た。

そこには、茫然自失でカーペットにへたりこむ元

東京市長、後藤新平の姿があった。

不意に後藤の相貌が歪む。

震災発生を予期する加藤等と敵対、空想に遊び、

予算を浪費する愚か者たちと罵詈譏を浴びせた記

憶。

反撃を受け、やむなく協力を決めた恥辱。

震災発生直前の陰険なやり取り。

大震災襲来。

予言の的中を前に記憶が走馬燈のように脳裏を駆

けているのだろう。後藤の唇が歪む。

「か、加藤君、わ、わしは」

加藤は自らの唇に人差し指を立てた。「今こそ力

を貸して欲しい、後藤君」

「なに」

「あなたにしかできぬ事がある」

「わ、わしは、きみたちの足を引っ張った張本人だ

ぞ。きみたちに醜態をさらし、あまつさえ愚かな

賭け事まで……わしに出来るのは」

絶句した後藤は膝を屈した。土下座の流れだ。

その肩を軽くつかんだ加藤は、諭すように言った。

「そんな事で民衆は救えんよ、後藤君。君が為す東

京への最大の貢献は、帝都復興なのだ」

「なに」

怪訝な面持ちの後藤に加藤は語った。

未来における後藤新平が大震災後の帝都復興計画

にどれほど心血を注いだか。それが政党対立や行政

面の不備で破綻、幻の帝都復興計画となった、その

いきさつを語った。

「だからこそ監査役に君を選んだ。君以外に、予算

を精査しつつ、史実を上回る帝都復興計画を立案で

きる者はいない。これは高野たちも承認済みの話

だ」

「待て、組織の立ち上げまで含めると初動が問題だ。

復興事業はスピードが鍵を握る」

「考慮の上だ。帝都復興院の立ち上げ準備は済んでいる。議会対策にも着手済み。初代総裁は君だ。受けてくれ、後藤君」

無言で後藤は立ち上がった。うって変わり、全身から生気を蘇らせている。

「わかった。全身全霊をもって、この後藤が帝都を復興させると誓う」

「それでこそ、台湾、満州にその人ありと謳うたわれた剛腕、後藤新平だ。お互い、過去は水に流そう」

「うむ。台湾以上の大事業だ。腕が鳴るわ」

「わしも及ばずながら助力するぞ、後藤君」高橋が続く。

後藤はうなずいた。「ありがたい言葉だ」

三者の手が重ねられ、後藤が微かに肩を落とす。

「持つべき者は、最大の好敵手か。ありがとう、総理。地震でわしの目が醒めるまで、待ってくれたの

だな」

「起きてしまった震災を覆せはしない。だが、新たな復興をもって、より良い東京、人々が安全に暮らせる帝都は造れる。君の本当の戦いはここから始まる」

「うむ。となると……問題は、震災による火災がどれほどの規模になるかだ。帝都復興はその先にある」

高橋の表情が曇る。「すべては魚住、高野、榊、松園、幹部四名の双肩にかかっておるといふことか」

「見守ろう、彼らの働きを」

加藤総理は窓辺を見た。窓がカタカタと鳴り始める。余震が訪れたのだ。

横浜・平塚では、前任曹長明石守以下、原発特殊部隊プロメテウス隊員たちの撤収準備が続いていた。「装備を確認。素早く乗りこみ、原隊に戻るぞ」

「重量計測開始。各員、残弾数を確認しろ」

「義烈団捕虜の体重計測を開始せよ」

「九名合計六五七キロ」

隊員たちの各種報告を明石は集計した。

「我々一〇名、装備こみで一二五四キログラム。義烈団捕虜合計六五七キログラム。総計一九一一キログラムだな」

「先任、AT飛行船と連絡が取れました」

部下が無線を差し出す。上空には既に海軍のアストラ・トール飛行船が到着、低空を飛んでいる。

「こちらアカシ〇一」

「艦長の大西です。収容手順を確認する。完全着陸はやらす、我がATの投下したロープに各員がぶら下がり、収容ということだが本当にやれるのか」

「飛行船の完全着陸には地上員の数が足りない。三〇メートルの高さなら、自力でロープを登れます」
 「判った。捕虜の方は、計画通り、電動ウインチで引き上げるが問題ないか」

「大丈夫です。途中で暴れても、落下しないよう特殊な拘束具でまとめてあります」

『了解した。そちらの重量は』

「総計一九一一キログラムです」

『わかった。これより降下開始、水バラストの順次放出と君たちの船内収容を同時に行う』

「離陸に重量が過大なら、隊員を二、三名置いていても大丈夫です」

『それには及ばない。これより実施する、以上』
 間を置かずAT飛行船が降下を始めた。

飛行船キャビンに海軍大尉大西おおにし たきじろう瀧次郎艦長の声が響く。

「帝国海軍の腕の見せ所だ。航海長、ダウントリム三度」

大西の脳裏に八月三日の光景が蘇っていた。
 榊一尉が訴える。

『ぜひともお願いしたい。危険な任務になるが、こ

れは、あなたにしかやれぬ任務だ」

その任務こそ、特殊部隊の収容だ。榊一尉が危険と断じたのもっともだ。飛行船が墜落する原因の二割は、低空飛行と着陸時なのだ。ましてや支援要員が皆無に近い状態の実施、普通は無理だ。

航海長が計器を読み続ける。「高度一〇〇、九〇、八〇」

大西は達した。「航海長、ダウントリム一度に修正」

「ダウントリム一度。高度七〇」

「航海長、トリム水平、機関停止」

「トリム水平、機関停止。高度五〇、四〇」

見張員が報告する。「アカシ〇一、ロープつかんだ。合図あり」

「牽引ロープ巻き上げ、始め」

一分とかわからず『捕虜収容完了』の報告が入る。

大西は矢継ぎ早に命じた。

「水バラスト、後部三二〇、前部三二〇、放出始め」

命令、号令が反復、バラスト投下が続く。

飛行船の操縦は潜水艦より繊細だ。操作は類似するが、重心変化、重量差分が遥かにシビアなのだ。

当直士官の報告が入る。「アカシ〇一全隊員、ロープつかんだ」

「航海長、緩やかに上昇する。振り落とすなよ」

急上昇ではロープから隊員たちが振り落とされる恐れがある。

大西は続けた。「水バラスト、前部六三〇、後部六三〇、放出、始め」

「よきとき宜候。水バラスト、放出始め」

飛行船は、上昇と水バラスト放出タイミング、一切が微妙なバランスの上にある。三〇度を越す気温も大敵だ。船体の制御がより複雑化する。

大西は拳を握りしめた。ロープ懸垂で八名を収容するのは前例がない。

舵輪が回され、命令と号令が続く。AT飛行船は収容作業を続行した。航海長が報告する。

「上昇角〇・七度。速力三〇ノット。上昇中」

「アカシ〇一、隊員、収容作業開始」当直士官の声。隊員たちが信じられぬ素早さでロープを登る。大

西は航海長と視線を交わした。

「まるで忍者ですな、艦長」

「凄まじい身体能力だ」

「デッキよりキャビンへ。アカシ〇一、全隊員船内に収容完了」

「航海長、高度八〇〇まで上昇後、前後水平」

「宜候」

「真方位〇一七、速力三五ノット」

舵輪が回され、AT飛行船は東京市本所区を目指し、増速した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。